

排出の規制等に関する法律，生活環境施設整備緊急措置法，公害防止事業団法，条例等が解説されている。

以上，この大系を通読してみても，編者の意図する公害という観点からの衛生工学の全貌を知るには大変便利であり，学生，衛生工学技術者はもちろん，公害に関心をもつ技術者の一読すべき著書である。

衛生工学の範囲はまだ確定していないせいもあるろうし，編集の都合上からと思われるが，いずれ公害問題と

なるであろう放射性廃棄物の処理，地下水の過剰汲み上げによる地盤沈下という公害の上から，また，下水処理水の再使用という点からも，工業用水の量とか質についても触れて欲しかった。また近い将来，増補改訂の折には，ある部門における一部の比較的古い資料なども，最近のものに変えてほしいものである。

日本評論社刊，A5判・312ページ（Ⅰ）/396ページ（Ⅱ）/356ページ（Ⅲ），定価1500円（Ⅰ）/2000円（Ⅱ）/1500円（Ⅲ）

＊ 新刊図書

中野尊正著

日本の地形

「日本列島のおいたちについては，いくつかのすぐれた啓蒙書によって，ひろく国民に知られるようになってきた。そのおいたちの最後のすがたである地形については，まだ不幸にして，全体をつくした書物は出ていない」著者は本書のはしがきでまずこう述べて，日本の地形についての体系的な解説を，ひろく地形に関心をもつ人々のためにまとめてみたいと思っていたという。

こうして，約10年前からそれを検討していたが，その集大成は難事で，今回はさしあたり日本の地形研究の問題点をえぐる序説的なものとして，本書を書き上げたという。この書では日本の地形学が，どのような問題ととりくみ，どんな答を出してきたか，今後の課題は何であるか，それらを地形の社会性を含めての解説，ならびに議論が展開されている。特に災害の問題を例に，一般の人びとに，国土への理解の必要性が強調されている。

内容は1. 日本地形学のあゆみ，2. 造山帯の地形，3. 山地の地形，4. 平地の地形，5. 海岸地帯の地形，6. 日本の地形地域，7. 地形学の応用（応用地形学の問題点，地形分類の応用面への発展，東京デルタ，水害研究への応用，地盤災害と地形，沿岸地帯の地形的災害），8. 地形の調査研究の技術となっている。全体に実例豊富で，著者のいっつもながらの軽妙でわかりやすい表現と，旺盛な批判性が，文面を活々と興味深いものになっている。さらに斬新な装幀とレイアウトは，書物としてきわめてモダンな感じを与える。巻頭16ページの航空写真もまた，日本特有のいくつかの地形を迫力をもって書き出し，本書を飾っている。

地形への造形にたずさわる土木技術者にとって，その地形の特質と，地形学の概観を知るには恰好の書といつてよい。

[T]

築地書館刊，A5判・362ページ，定価1400円

織本錦一郎監修

金原 正・奥村修一・矢是栄士・斎藤圭弘 共著

駐車場の計画と設計

駐車場の整備は，すべての都市が直面している深刻な都市計画上の課題である。

都市の駐車難を解決するために，いろいろの方策が講じられている。たとえば，昭和32年に公布された駐車場法は，道路交通の円滑を図って，都市の機能を維持するため駐車施設を整備しようという意図のものであり，大規模公共駐車場設置が都市計画として計画決定され，建設されるようになったのである。以来，駐車場の整備は着実に進行し，現在は，東京，大阪などの大都市に，大規模駐車場の設置が見られ，民間経営の施設もかなり設置されている。しかし，わが国の駐車場整備は，ようやくその一歩を踏み出したばかりの段階で，今後ますます拡大されるべき事業である。

本書は，日本道路公団が施工した日比谷自動車駐車場，大阪長堀自動車駐車場，福岡自動車駐車場等の計画，設計，施工，管理運営上の資料を分類整理し，駐車場設計にたずさわる人々の参考に供せられたものである。駐車場設計に関する資料の乏しい現情からみて，時宜を得たものであり，高く評価される。

内容はつぎの6章からなっている。

I. 駐車場の計画，II. 駐車場の設計，III. 電気設備，IV. 機械設備，V. 管理運営面についての問題，VI. 駐車場と法規

以上のうち，出色ともいふべき章は，II. 駐車場の設計であり，全体設計から各部分，駐車部分，車路，斜路および付帯施設の設計に至るまで，豊富なデータが集約されており，設計の参考書として好適である。

計画および管理運営については，経験，資料が少ないこともあって，やや不十分である。なかなか難しい問題であり，今後の研究にまつべきところと思われる。

[T]

鹿島出版会刊，B5判・279ページ，定価2500円

現場技術者のための 建設機械と施工法

気象災害

本書の目次をひらいてみると、第1章は“建設機械と施工法”(これは序論的な記述)、第2章は“機械化施工の基礎知識”(土質、気象、土木材料、土工に必要な測量、土量計算についての基礎的事項を平易に解説している)、第3章は“機械化施工の運営管理”(この章は計画、作業能力、機械経費の算定、現場管理の方法を詳説している)、第4章は“建設機械概論”(100ページにわたり建設機械の各種が解説されている)、第5章は“施工法”(機械化施工の要領が述べられている。従来のように単に土工のみに止まらず、軟弱地盤処理工、除雪工などが加えられているのが眼新しい)、第6章は付録(単位と換算表、諸数値と記号、おもな建設機械の諸元、機械経費積算の基準など、機械の用語、土木の用語)となっており、全部で346ページにおよんでいる。

ひろい読みとして感ずることであるが、まず非常にたくさんの方が書いてある本である。建設機械による施工(めずらしげに機械化施工とよぶ時代はすでにさったようだ)は、非常に広範な知識を必要とする。現場の技術者の指導書として、そのすべてを平明に解説しうる単一な著者を求めることは至難なことであろう。

本書は建設機械化協会内に設けられた伊丹博士を委員長とする27人の編集委員によって分担執筆の上、とりまとめられたものであるが、斯界の権威である各委員が執筆され、しかもそれを十分検討されて編集されたからこそ、非常に広範にわたり、平明な、均等なウエイトがかけられた本書ができたのであると思う。

内容は執筆者がつとめて平易に、むずかしい表現をさけて解説された努力がみられて非常にわかりやすい。ごく基礎的な知識しかない若い技術者、および学生諸君には参考書として十分利用できると思われる。

大学の土木の講義に土木施工法、あるいは建設機械とといったものが必ずある。新しい土木技術者を育成するには、本書にもらわれている内容の大半は学生に理解してもらいたいと思う。しかし分量からみて、これをテキストにするには内容が豊かすぎる。

「建設機械施工技士」試験の受験参考書としての活用をねらっておられるようであるが、現場技術者の伴侶としてだけでなく、学校の講義を補足するために学生諸君が参考書として精読してくれるようになると大変有意義であると思ふ。

[K]

技報堂刊, B5判・346ページ, 定価1800円

一般に災害は現在の学問分野から見ると、各方面にまたがるテーマとなる。したがって、災害に関する専門書はその記述が相当に困難で、また各専門分野の人々のチームワークによらねばならぬことが多い。今回、防災科学技術シリーズの第一陣として、6名の気象庁関係者による“気象災害”が出版された。

序文に編者が述べているように、本書は気象学を専攻する学生、研究者、あるいは気象を職業としている技術者のためというより、むしろそれ以外の関連諸分野の読者に役立つようにとの意図で執筆されている。したがって、個々の気象現象や測定の基本的なことから、大略ではあるが門外漢にも十分理解できるような説明が相当親切になされている。

気象災害という面では、災害の地域性についてかなり力点が置かれ、また社会環境の変化によって気象災害が歴史的に変遷してきたことに注目している。具体的内容は、日本の気象の特性、災害のための気象学概論、災害の地域性、災害の種類などから、損害保険をも考慮した防災対策におよんでいる。最後の部分でのかなり詳しい気象災害年表、気象表(気温、風速、降水量、積雪、湖位などの順位表など)は、防災関係の技術者にもきわめて便利であろう。

もとより災害の問題は複雑で、気象災害と一口にいっても、地震以外の自然的要因に基因する災害はほとんど含まれてしまう。したがって、個々の災害についてまで深く取り扱かうのは無理で、本書も気象災害に対処する場合にぜひ心得て置くべき、やや高度の常識と考え方を養成するための好著と評価できよう。土木学会誌に最近連載された“土木と気象”を執筆した奥田穰氏が、本書では気象と災害という面から担当しておられ、編者の島山氏の他、鯉沼寛一、高橋浩一郎、石原健二、斎藤練一の諸氏が分担執筆している。

なお、この防災科学技術シリーズは土木、建築、気象、地理、地震など各分野から編集委員が構成されており、今後各種災害ごとに出版されることになっている。

[T]

共立出版刊, A5判・456ページ, 定価2500円